日本大学三島高等学校
同窓会会報
第 8 号
昭和54年3月1日
静岡県三島市文教町2
日大三島高校同窓会　発行

母校二十周年を迎える

昭和五十三年度は同窓会にとって、大きな転換の年となった。その第一は同窓会規約第二十二条の改正に伴ない会長が会員の中より選出されることとなった。第二に母校が開設二十周年を迎えたことにより、これに呼応して本会も、発展的な会として成長が期待されるようになったことである。このことは、本会が初期の段階を終え、成人期に至ったということであり、会員相互の親睦・成長はもとより、周囲からの期待に応えるべく、活動の充実が急務とされる。

御挨拶

会長　高田菊平

母校が開設二十周年をむかえましたことは大変喜ばしくここにお祝い申し上げます。

この短期間に現在のような優れた学校として築き上げて下さいました諸先生・関係者の皆様方に心より感謝申し上げたいと思います。

同窓会は母校の発展の為に大いに寄与して行かなければならないことは当然のことでありますが、同窓会もこの間、前会長の玉津先生の強力な御指導のもとに同窓会としての組織づくりをつづけてまいりました。既に会員も二万余名をもつ大集団となった今、ますます「新しい時代に適応する仲間集団」を提唱した前会長の言葉の如く、さらにその機能を充実するように進めてまいりたいと思います。母校開設二十周年を機に玉津前会長自から発案し、同窓会規約第三章第二十二条（会長は学校長を推戴する）の改正を決議し、同窓生の中から今回会長を選出することになりました。この決議によりまして私が会長職をおおせつかりましたことを御報告申し上げたいと思います。もとより微力な私でございますが皆様方の御協力により努力したいと思います。よろしくお願い申し上げます。尚前会長玉津先生には同窓会に対する御尽力に対しまして、同窓会の規定によりその労苦をねぎらい感謝状と記念品を授与いたしましたことをあわせて御報告致します。

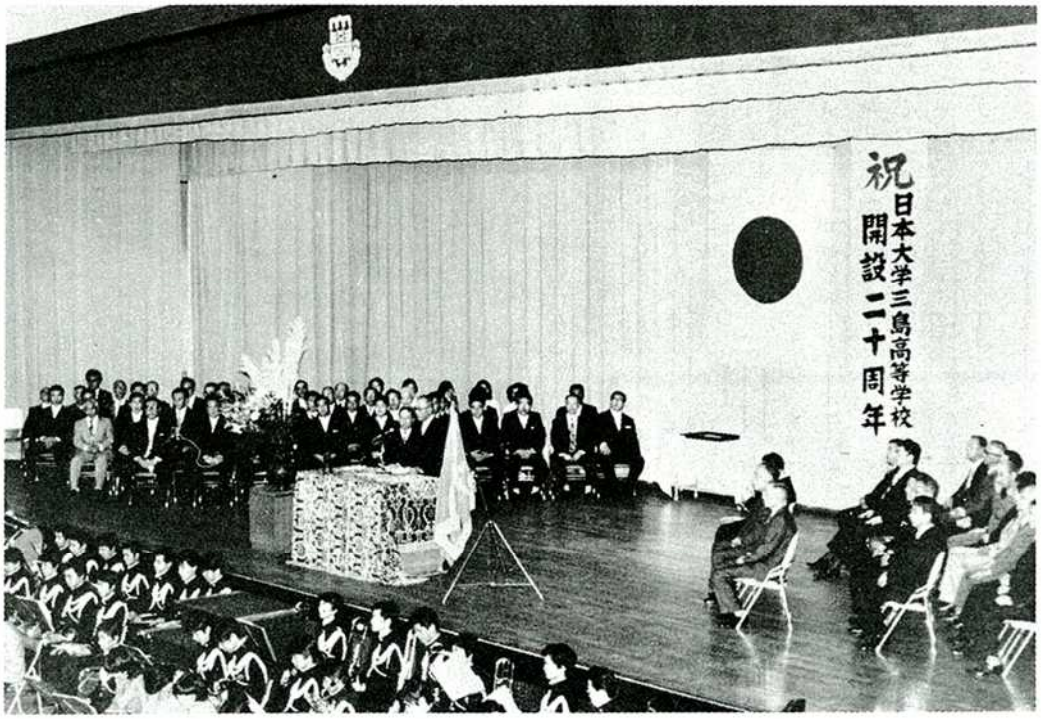
会員の皆様、どうか今後の同窓会の発展の為に御尽力下さいますことを切にお願い申し上げ御挨拶と致します。

会長 高田菊平氏の紹介

本校第一期卒業生。田方郡天城湯ヶ島町出身。現在、株式会社ニュー・デルタ工業（三島市梅名）専務取締役。昭和五十二年度まで七年余の期間、幹事長として同窓会発展の名実ともに、けん引的存在であった。特に本会が十支部設立により、活発な活動をはじめようとした時より尽力され、その間各支部を訪れ本会の主旨を説き、支部活動の基礎作りに活躍。

今期、会則の改定により会長に選出され、これまでの経験と広い視野により、その手腕が期待されている。

趣味はゴルフ・歌など!!



開設20周年記念式典

お世話になった先生方

同窓会の成人期を祝福する

顧問　玉津徳太郎

日本大学三島高等学校同窓会は母校開設二十周年という記念すべき年に、会員の中から会長を選出し、自主的運営をすることになった。まさに成人期に達したというべきであり、その前途の発展を祝福するとともに、一層充実した存在となるよう期待する次第である。

かえりみると、本会は本校第一回卒業生によって昭和三十六年に結成されたものであるが、いうまでもなく開設当時は、卒業生も年齢的にも社会経験的にも未だ若すぎた。そこで、同窓会の指導育成の意味もあって、母校の校長が同窓会長を兼ねる形態がとられた。しかし、卒業生の熱意と母校の指導で、年々着実な歩みを続け、次第に地域社会に定着する会員数も明らかになって、母校の発展興隆に協力するという、本会の目的による活動も目立つようになって来た。

そこで、昭和四十六年になって静岡県東部地域を中心に十支部（静岡市、清水市、富士宮市、富士市、沼津市、三島市、御殿場市熱海市、田方郡、小田原市）を設け、それぞれに支部長・副支部長・幹事などの責任者をおき、最寄りの会員との相互連絡、親睦と融和をはかる核が設定された。こうした地域社会の組織化に伴って、本部役員の改選、本部機構の整備も実施され、地域に根ざし、母校に接近する密度を高めることによって、現在にみられる同窓会組織と役員を代表とする同窓会活動が成立したのである。

その活動の主なものをみると、母校の主要行事に参加応援すること、支部毎に特色ある催しをすること、同窓会基金を積みあげ、その利子の範囲で年間予算を建て、本部並びに支部の事業を計画的に実施すること、などであるが、とくに新入会員の入会式後に斯界の名士を招き、時局講演や教養講演を持続的に開催することなどは特記すべきものであろう。（最近のものに、江木武彦氏「民主社会と対話」・山谷親平氏「現代を考える」・金井清教授「地震の話」・藤村郁雄氏「富士山の気象について」などがある。）

また、後輩のために奨学金・奨励金の規定が設けられて昭和五十二年から実施され、一般会員の顕著な業績に対する表彰規定も設けられている。しかも、昭和五十二年三月母校校長の交替を機に、会員から会長が選出された。

これらの点からみても本会の成人期は堅実に迎えられた。将来の充実発展を期待して回想の結びとする。

母校は日本大学関係学部付属となる

校長　橘　和彦

わが日本大学三島高等学校も、本年度、二十周年記念式を挙行し漸く一人前になった。そこで、同窓会も、前校長玉津徳太郎先生が会長を辞任し、規約を改正して、第一回卒業生の高田菊平君が同窓会長となった。

つぎに母校について、来年度から、さらに喜ばしい事がある。わが校は正式には文理学部の付属高校であるが、三島学園は文理学部の分校的存在であったから、いわば分校の付属で、文理学部本部とは縁の遠い存在であった。そこで三島学園は数年来独立の学部になる努力を続けて来た。しかし、客観的情勢はそれを許さなかった。

日本大学は総合大学として完璧で不足を償う学部を見出すことは至難の業であった。さらに私学が助成金を受けるようになって、大学および学部の増設がこの五ヵ年間停止されることになって、三島学園の学部昇格は不可能の公算が大になった。ただ、緊急にして、日本文化の発展上不可欠と認められるものは、将来の助成金の枠を圧迫しない限り認めるという文部省の例外規定があった。そこで大学本部指導の下に三島学園で考え出したのが、国際関係学部であった。

この学部は、現在の日本社会の国際化の要請に応え、広い国際的視野と語学的要素を基礎に、国際関係を深く理解しうる人間の育成を目的とするものである。そしてこの学部は国際関係学科と国際文化学科に分れている。前者は、アメリカ地域・ヨーロッパ地域・アジア、オセアニア地域の各コースに分れ、その地域の法律・政治・経済を学ぶものであり、後者はアメリカ・ヨーロッパ・中国・日本の各文化コースに分れ、その地域の文学・歴史・思想・芸術を学ぶものである。

この学部建設は、元日本大学常任理事、文理学部顧問の鈴木先生の助言の下に、企画されたのが故安藤先生であり申請されたのが玉津先生であり、現在の責任者は岩城次長である。

ここにわたくしは、母校が国際関係学部付属になったことを同窓生諸君に報告する。

第一期生　二十周年に想う

植田正年

母校が二十周年を迎えたことは第一期卒業生としてこのうえのない喜びであります。

昭和三十三年四月、開校と同時に入学した私達三〇〇余名は、先生方の御指導のもとに新進の気に満ちた毎日の学校生活であり、思い出深いものであった。そして二十年が過ぎ私達も三十代の後半となった今、当時の思い出にひたることもしばしばである。そんな時厳しくも御指導下さった先生方の教えが、少人数ながらも頑張ったクラブ活動が、弱気となった自分をふるい起し、活力を与えてくれる。何とも有難いことであり、貴重な体験であった。

私は現在、田方支部長の立場にある。そこで常に思うことは、同窓会という精神的団体の運営は極めて難しいということである。特に具体的なものがある訳でなく、唯々精神的なものが主体であるため、ややもすると二次的扱いをうける。しかし熟考するにつけ同窓会の意義は派生的要素を含め充分認められるはずである。母校の二十周年を機に同窓会のよりよき発展を願うとともに、小生自身も改めてその意気に燃えるものである。

ある生徒の思い出

日大教授　藤岡武雄

私が日本大学三島高等学校に赴任したのは、今から十七年前に当る。雑沓の東京から、自然環境に恵まれた三島学園へ。毎日のように富士の姿を仰いで、教育にたずさわることの出来る喜びを感じたものである。

その時の感慨をつぎのように歌によんだ。

真白なる富士真向ひに迫りくる
霜深き日の朝明けにして
俄にも寒さ来れば富士の雪われ
の小さき窓に光れる

もう開設二十周年を迎えた。この二十年間は、まさに発展の二十年間であったと思う。着々と充実発展を続けてきた学園の中で、幸福にも教師のはしくれとしていたことの感激は深いものがある。

その間、私が担任した生徒も、今はそれぞれ立派に成人し、社会人として活躍をしている。ある者は公務員として、ある者は技術者として、ある者は会社員として、そういった中で、私の脳裡にいつも思い出される幾人かがある。

その一、N君。丁度、昭和四十三年の日大紛争の年であった。私は三年生を担任していたが、眼前で大学生が騒ぎ出し、その影響が高校生にも波及した時である。かねてから丸頭主を守ってきた頭髪問題が、この機会に爆発したのである。野外ステージで生徒が集会をもち、長髪を認めるよう団交が始まったのである。結果は生徒の要求が通り、おさまったのであった。その際、私のクラスで一番先に友人に呼びかけて集会に参加したのがN君であった。その後、大学進学を決める時期になった頃、N君は進学の希望をすてて板前になることを決意した。一番先に旗をふって大衆団交にかりたてたN君が、紛争にあけくれる当時の大学への進学をすてて、板前修業をするというのである。私はこの心意気に感激した。

彼は上京して、その腕をみがき現在では御殿場で板前として独立し、立派な店をもっている。

その二、T君。体格はずばぬけて立派。だが動作はのろく、気の弱い生徒であった。卒業して二年経ったある日、相撲部屋に入って力士を志すといって挨拶にきたのには驚いた。

私はひそかに相撲界のきびしさに耐えうることができるのか、それが一番の心配であった。だが、一年間はがんばってよい成果をあげた。しかし、長く続かず、今はその消息を知らない。

この二十年間の私の担任した生徒のおもかげが浮んでは消えるこの頃である。

創設期のころ

日大教授　谷口富男

二十年をふり返ってみると、さまざまなことが胸の中を去来する。まず第一に新入生三〇四名を五クラス編成にして迎え、頭髪は短髪でカバンはズック（布製）をさげて登校していた。専任教員は学校長角田陽六先生、教務主任伊奈恒一先生、白井将一先生、高杉洋二郎先生、中神義夫先生、田上清美先生、田中誠一先生そして私の八名で、これに加えて大学の先生方の援助を得て開校した。建物もほとんど木造で、床などはセメント状で、放課後の清掃のときは、机や椅子を持ちあげて運ばないと磨滅状態がはげしかった。創設期というものは、何事においても、不備・不足というものがつきもので新入生たちにはずい分不便をかけたものだった。学習面にも、クラブ活動においても。しかし人間にとっては不便・不自由が生じると互に知恵を出し合って助け合い、物事の処理には効率的になしとげようと努力するものである。グラウンドなどでも現在のように整地されておらず、雨あがりの日など補欠授業を利用して草抜きをしたこともあった。日大前のイチョウ並木通りでも舗装されておらず、車の往来の少ない証拠に、牛車にサツマイモの蔓を満載して御者の姿は横から見られない状態でも牛は交通事故を起さずに歩いていた。現在では想像もつかないさまであった。学校の遠足などは裾野の五龍館さきの滝まで徒歩で往復したり、沼津の香貫山を一周したりしたことなど、昨今車の洪水には到底実施されない。洪水というと三十三年九月に狩野川が氾濫し、多数の死傷者がでた。一期生の中にも被害をうけたことはお気の毒であった。クラスの代表者と先生方が手分けをして、関係者を訪宅したり、大学生も高校生も韮山へ救援活動に出かけたことなど決して忘れられない。こんな状況下であったため大学祭を中止した。

一期生たちはすでに三十六・七才になり、さまざまの職場において、中堅として、活躍している。後輩たちも負けずに躍進しているさまは慶びに堪えない。三〇四名で出発した高等学校はさらに発展し、知育・徳育・体育の三位一体となった健全な人間が育成されることを願って止まない。

第五期生

二十周年の感想

本校教諭　桑原康晃

母校を巣立って、早、十四年の歳月が過ぎ去ろうとしている。昭和三十七年から昭和四十年の高校時代、これは五期卒業生の年代である。この時の卒業記念アルバムをなつかしく紐解くと、心はすぐにその時代に移行する。木造の大講堂が立派なものに、昔の馬洗い用のプールがなくなり公認の立派なプールができ、我々の時代に校長先生の交替があり、諸先生の若々しい顔がその当時を思い出させてくれる。アルバムの一ページ、一ページがなつかしく、今の私に母校を思う心をなおいっそうかき立ててくれる。同窓生の諸兄、諸君の皆様、是非一度卒業アルバムを眺めてみて下さい。そして、是非母校を尋ね、諸先生方、後輩諸君と共に語り合い、母校の増々の発展を願おうではありませんか。二十周年を迎え、また国際関係学部直下となった母体は今まさに羽撃く鳥のごとく飛躍しようとしているのであります。

母校創立期からの先生

母校二十年の歴史の中で、その草創期を知る恩師、白井・田上・中神の三先生は、先の二十周年記念式典において、その功労と栄誉を讃えられ、なおご活躍中であります。

我々同窓生に親しまれたこの恩師の方々にその想い出の一端を述べていただきました。

二つの部活動の思い出

田上清美

本校開設当時は、専任の先生方は学校長を含めて八人であり、部活動の顧問も一つの部ではとても生徒の希望に応じ切れず、二つの部を掛け持ちをすることも必要となった。私は最初文芸部の顧問をしていたが、やがて卓球部の顧問も兼ねることになり、放課後は二つの部活動の指導で、明るいうちに校門を出ることは稀であった。

夏休みになると、卓球部の諸君と一緒に合宿し、大学の卓球選手をコーチに招いて、一週間共に汗を流したものであった。また、文芸部の諸君とは文学散歩に出かけ修善寺にある夏目漱石ゆかりの碑を訪ねたり、川端康成が「伊豆の踊子」を書いたといわれる、湯ケ島にある湯本館の四畳半の部屋を訪ねたりしたものであった。

このように、私は二つの部活動の顧問をすることによって、自分の自由時間は殆ど持てなかったのであるが、その当時の苦しみや悩み、障害を乗り越えて、生徒諸君と共に活動した思い出は、自分の若き日の情熱の思いとともに、今では懐かしい思い出である。

開設二十年に思う

白井将一

束の間に過ぎ去ったような二十年間でしたが、本校の発展はめざましいものがあり、開設当時と比べると、最近十年間を平均して、卒業生数は約五倍、教員数は約二・八倍になり、同窓会員数は実に一万九千名に達し、施設、運営面をはじめ多くの面に大きな変革をもたらしました。

本校の今日の隆盛は、ひとえに大学当局や同窓会の強力な支援のもと、各時代における教職員と在校生の協力一致の結果にほかなりません。

今後、本校という若木が年輪を重ねて、ますます立派な大木をめざして成長することを祈るとともに、本校で実を結び、相次いで社会に散っていった同窓生たちがそれぞれの職場でしっかりと根を下ろし、連帯の輪をひろげて、大きな力を結集されることを望んでおります。

それにつけても、在校生をあづかる身として、いかにして枝にすばらしい花を咲かせ、健やかな実を結ばせようかと、今更ながら責務の重さを痛感する次第です。

S君の思い出

中神義夫

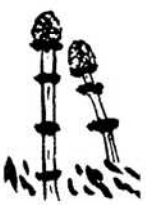
本校に水泳部が出来たのは開設の翌年である。

私は初代の水泳部の顧問として素人なりにも部員と共に努力した。

三期生の水泳部の一員としてS君がいた。S君は自由形の選手として入部したが、足首の堅さは自由形の選手が多い部員の中でバタフライの選手に転ずることをよぎなくされた。S君のひとがらは一言にいって実直であり体は逆三角形で、ギリシャの彫刻に出てくる様なものである。さして上手な泳ぎは出来ないがバタフライの選手の少ない本校の水泳部にとって貴重な存在であった。彼の泳ぎは、スプリントはないが持続性は抜群他の部員が「八百米バタフライがあればS君は全国大会で優勝するのではないか」等といったほどである。私は、好人物の多い水泳部の部員の中でも人間的に好きな生徒の一人であった。学業成績も全般的には優秀で、ことに文科系の科目を得意としていたのである。

私は、他学年を担任していたので一年生の数学Ⅰを一学級だけ担当したが、その学級内にS君がいた。当時の私は理科系科目が不得手な者にはことにファイトがわいた。水泳部の一員でもあることだし、ぜひともS君を数学好きの生徒にしてみたいと素直に叱咤激励した。ある日、授業の時に三度さしたが答えられない。彼に腹をたて心ならずもきつい言葉をはいてしまった。S君は日頃かなりきついことをいっても頭をかいてにこにこしているのに、その時ばかりはだまって下をむいていた。瞬間的には変だなと思ったが授業を進めて行った。次の時間も授業があったので、彼のことは頭からきえていた。その昼休みに彼が職員室の入口でいつもの様に礼儀正しく挨拶をして入って来たのを見たとき、やはり私の期待が重荷になったのだなと直感した。案の定おもいあまった様子で、口をついて出て来た言葉は「水泳部をやめさせて下さい」であった。「私の心を理解してくれていないのだな」と思うと同時に不覚にも私の眼から涙が流れていた。君はそんな気持でいたのかと言葉もなく下をむいた。その後一言、二言、話をしたが何を言ったか今は記憶にない。ただ、今でもはっきり憶えている事は、その一時間後に職員室に、さっぱりとした顔で「さきほどはつまらないことを言ってすみませんでした」と言って来たことである。教師にとってこちらの気持を素直に理解してくれた時ほどうれしい事はない。

S君は、三年の時、部委員をつとめ大学へ進学し、現在は中学校の先生をしていると人のたよりには聞いている。



母校と同窓会のつながり

幹事長　遠藤日出夫

本年も第十九期卒業生を会員に迎え、同窓会も五十四年度の活動を始める時期がきた。

二万人を超す多数の会員のうちここ数年、地元に定着する者が増える傾向にあり、今後の会の運営にとって喜ばしいことであるが、幹事長としてその責任の重さを感じている。

思えば十支部を発足させるため玉津前校長、北岡先生の助言を受け、静岡から小田原まで走りまわった八年前から、昨年の新会長選出まで、小さな一歩ではあるがわずかずつ前進してきた。

会の組織強化による成果は、これから何かできる可能性を与えてくれよう。しかし、同窓会はあくまで母校を基盤とし、両者が平行線をたどってはならない。平常は疎遠になりがちな母校であるが、何らかの関心はもっていよう。新聞等で母校の記事を見ては、最近一、二年間の運動部不振を残念に思い、交通事故の暗いニュースにがっかりすることもある反面、水泳部やスケート部の県団体優勝、全国大会での活躍は自分の事のようにうれしくなる。

母校と同窓会の精神的なつながりを少しでも形で表わせるよう二年前から始めたものに、在校生に対する表彰規定がある。表彰に値するクラブが数多く出るよう期待したい。

二十周年を迎えた日大三島高校がさらに発展するにあたり、大学に帰属するだけの学校から、独自の校風を作り出せるよう我々も、自身の堅実な生活の中で発展興隆に寄与したいと考えている。

幹事長 遠藤日出夫氏の紹介

本校第二期卒業生。駿東郡長泉町出身。現在、長泉町にて割烹「静山荘」を経営。

昭和五十二年度まで第三代目の三島支部長であり三島支部の発展に寄与するとともに、同窓会全体の運営にも尽力し、夏の行事〝納涼船〟毎年二月の新入会員入会式等に積極的な姿勢を示し、会員の期待に応えている。彼は在学中、バスケット部に所属し、その間に果敢な行動力と旺盛な精神力を身につけ、OB会はもとより、多方面に渡り活躍将来に期待すること大である。

第十九期生　～歓迎のことば～
「新入同窓会員を迎えて」

第十九期生の諸君、ご卒業おめでとうございます。

諸君の同窓会への入会を、一万九千余名の同窓会員一同心より歓迎いたします。

開設二十周年を迎え、地域社会に根をおろした母校も、新入会員を加えて二万余名となります。

この徐々に膨れてゆく多くの仲間は、かけがえのない高校時代を青春時代を、桜陵の学園で過ごした絆で強く結ばれています。

世代を超えて、地域を超えて、職業を超えて、いつまでも一つの暖かい思い出で、心が一つになれる仲間です。

社会生活は、仲間との生活であり、仲間造りは社会生活の基礎です。

厳しい社会の流動の中で、同窓の仲間との精神的結束こそ何よりも力となり、心の支えとなり得るでしょうし、個々人の生活をも大きく発展させてゆけるでしょう。

いつまでもこの絆を忘れることなく、同窓会に積極的に参加していただき、母校の発展を願いながら、二万余名の会員の一人一人の発展を祈って歓迎の言葉といたします。

〈新入会員挨拶〉
大切にしていきたいもの

第十九期生　杉山正明

三年間の高校生活も終え、数々の思い出を胸に今、高校生活の中で暖め合ってきた友情の輪をさらに広げ、私達は、本校卒業生として、また新たに同窓会の一員として、母校を見守っていく立場となりました。

本校の同窓会は、地域的組織化を推進し、設けられた支部も十を数え、広範囲に渡り活躍されている卒業生のために、支部別また合同で行なう事業をはじめ、会報発行など、幅広い活動を展開していると聞いております。

昨今、「不確実性の時代」などと言われ、変化の著しい時代ではありますが、いつまでも変らず、大切にしていかねばならぬものが人との触れ合いというものだと思います。しかし、現在までの私達は、同年代の友を得ることしかできませんでした。大学進学あるいは社会へと飛び立っていく私達にとって、年齢差を超え、縦にも横にもしっかりとつながっている同窓会というものは、心の大きな支えであります。この同窓会を通じて、人との触れ合いを大切にし、社会人としての人格の形成の過渡期としていきたいと思います。

私達十九期生は、在学中に体得した自由と規律の精神をいつまでも心にとどめ、母校日本大学三島高校と同窓会の発展のため、微力ではありますが、惜しみない協力をする所存であります。

先輩の皆様、どうぞよろしくお願い致します。

十九期生　クラス幹事

三の一	杉山　正明
三の二	杉山　博治
三の三	栗原　淳
三の四	大賀　誠
三の五	大竹　誠
三の六	萩原　喜義
三の七	堀内　吉久
三の八	田中　政孝
三の九	間野　寿康
三の十	長島　昌之
三の十一	望月　卓
三の十二	杉山　浩
三A	渡辺美智代
三B	渡辺　泰江
三C	土屋　弘子
三D	露木　倫子
三E	加藤みゆき
三F	鈴木　浩子
三G	鈴木　優子
T三A	鈴木　昭彦
T三B	石原　伸之
T三C	高石　靖
T三D	杉崎　英和

同窓会の現況について

副会長　田中哲雄

第十九期生の皆様、ご卒業おめでとうございます。いよいよ私達母校の卒業生も本年で二万名有余となり、同窓会もまさに大集団化してきました。また同時に今後における同窓会の役割も増々大きなものとなって参りました。従がって、精神的、社会的にも名実共に大きく成長しなければならない時期を迎えました。思えば、昨年校長を退かれた前会長の玉津徳太郎先生をはじめ、諸先生方のご指導とご尽力に支えられながら、現体制の同窓会が確立されて現在に至っている訳でありますが、殊に玉津先生の熱心なご指導とご尽力には敬服し、紙上を拝借し『感謝と御礼』を述べさせていただきます。本当にありがとうございました。そして私達同窓会は、年々、卒業生名簿の作成、同窓会報発刊、新入会員の入会式並びに記念講演会奨学金制度の実施などに着手し、一応の体制づくりには成功してきました。しかしながら同窓会の基盤は何と言っても、各地区ごとに構成された十支部でありますが、現在の十支部活動状況は必ずしも充分ではなく、特に同窓会活動全体を活発化ならしめるには、あらためて各支部内において、支部内容の再検討、再編成をし、充実、拡充強化をしなければならないと考えます。一方予算面においても各支部は行事のための通信費等の値上がりや、卒業生の増加などによって台所は決して楽ではないのが実情であります。そこで各支部への交付補助金を現行よりアップして交付し、もって同窓会活動を一層円滑ならしめる必要があります。その他、本部・支部共解決推進しなければならない問題が山積しておりますが、ご卒業される皆様と一諸により良い同窓会づくりを考え共に歩んで行こうではありませんか。

副会長 田中哲雄氏の紹介

第一期卒業生。三島市出身。現在、株式会社倉田一級建築設計事務所代表取締役。同窓会発足以来、第二代目三島支部長ほか常に幹事として活躍。会長、幹事長をたすけ信望も厚く、今では本会にとって必要不可欠の人物である。

熱海支部だより

支部長　谷口俊司

我が熱海支部は、熱海市・伊東市・下田市・賀茂郡と、かなりの広範囲の支部として、昭和四十七年に発足以来七年目を迎え、会員数も約千二百名になります。その間日本大学の建学精神に基き、会員相互の親睦と融和を図る為、毎年春の総会と、夏の親睦会は家族ぐるみでと、数少ない行事ではありますが、一歩一歩と前進しております。

昨年は、春の総会には熱海支部発足の時大変おせわになった高桑先生を始め熱海支部関係の先生方と盛大に開く事ができました。

又、親睦会としては、サイクルスポーツセンターへの家族レクレーションと、ボウリング大会と二行事を行ないました。文字通り、ファミリーの和をもって、当初の目的をはたせました。

又、支部名簿も各期幹事の皆様のおかげで昭和五十二年にでき上りましたが完全の物とする為、各幹事がひまをみつけては整理にとがんばっています。

母校開設二十周年の記念すべき年に卒業式を迎える新会員の皆様新鮮な息吹きと、パワーを期待し皆様の御活躍を期待するとともに同窓会への積極的な御協力をお願いいたします。

工業科の動き

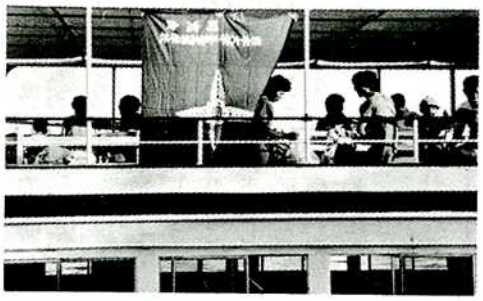
工業科には、土木・建築・機械・電気の四科があり、それぞれに同窓会組織を作っております。すなわち、工業科の生徒は、卒業と同時に日大三島高校の同窓会に入会しますが、同時に工業科の各科同窓会にも入会するわけです。今回はそのうちの機械科同窓会について紹介したいと思います。

機械科同窓会は、他の三科よりも遅く、昭和五十年に発足しました。しかも翌五十一年には機関紙を発行するに至りました。が、逆に参加者の年齢が十才以上も離れているせいか、総会への出席者が半減してしまい、二年目にして総会を流会にしてしまいました。電気科の様に毎回百人以上もの参加者がいる科とは比較になりませんが、とにかく、機械科同窓会が軌道に乗るまでは、たとえ人数が少なくても毎年総会を開き、実績を作りながら参加者を増やしていかなければならない！という事で、本年度第二回総会を開き、毎年九月二十四日の秋分の日に、八号館で総会を開く事に決定しました。しかも来年度は機関紙第二号の発行と同時に、一期生から十六期生までの名簿も発行し、五十年度以後の卒業生には無料で配布する予定です。以上が機械科同窓会の現状です。

納涼船

沼津支部長　高木弘之

同窓会唯一の集合体である、と申し上げても過言ではなかろう。会員の交流はもとより会員家族の紹介の場でもある。その成果は着実に実を結び毎年盛会裡に拡大されている。裏方の皆様の苦労は大変であるが、その苦労が会員相互の信頼として立派に毎年生きているのである。同窓会発展の唯一の場として、展開の方法として育っているのであります。船宴、船上花火等、一夜の寸暇を良き思い出として積み上げていける幸せを各人がもちたいものです。盛会とはいえまだまだ会員の一握にすぎません。誌上を借りてPR、今年は是非参加をお願い致しておきます。涼を求めて夢を求めて、会員各位の発展を期待してやみません。



昭和五十三年度 クラブ活動の状況

各クラブとも活躍が見られ好成績を残しているが、我々が特に注目すべき野球部の東部大会優勝が今年の一つの話題であろう。以下本年各部の成績を上げて見ると

野球部 秋季東部大会優勝
夏季大会二回戦

サッカー部 高校総体東部大会優勝・全国選手権東部予選優勝・県大会ベスト16

バスケットボール部 新人戦県大会3位

バレーボール部 新人戦東部大会準優勝

陸上競技部 全国総体出場
臼井義文（百m・二百m）

テニス部 県大会シングルス3位
全国大会出場

柔道部 団体・個人とも県大会出場

剣道部 団体・東部大会準優勝

卓球部 県大会団体3位
国体県大会個人優勝

体操部
県新人戦個人総合（男子）3位
〃 〃（女子）3位
種目別 男子跳馬 優勝
種目別 女子段違い平行棒 優勝

水泳部
全国総体県大会優勝
東海大会優勝
全国総体8位
国体 2位
須田有美子
全国総体県大会優勝
東海大会優勝
浜田 恵
東海大会2位 水野賀寿光

スケート部 県総合優勝
スポーツ祭優勝
国体出場 5名

以上の様な成績であるがその他県スポーツ祭、私学大会、全日大体育大会等で各部とも好成績を残している。

又、このほか本校および静岡県としても、大へん名誉でもある2名の生徒を紹介すると、野球部2年谷口良秀君は冬休みに行なわれた、日比親善野球に県選抜選手としてフィリッピンへ、又、バレーボール部の高橋安夫君が夏休みに行なわれた、環太平洋バレーボール大会に、全日本代表選手として参加し、両名とも活躍して日大三島の名前を大いに上げてくれた。

熱の入る練習

昭和五十三年度 事業報告

一、総会 四月三十日 於母校
一、幹事長挨拶
一、会長挨拶
一、学校長挨拶
一、議事
(1)昭和五十二年度事業・決算報告
(2)昭和五十三年度事業・予算計画
(3)会則改正の件
(4)役員改選の件

二、幹事会
一、四月八日 於喫茶「欅」
○支部・各期役員の件
二、四月二十二日 於喫茶「欅」
○総会の件
三、七月二十六日 於喫茶「欅」
○納涼船について
○希望の森（二十周年記念誌）について
四、十二月十四日 於不二美食堂
○会報発行の件
○新入会員入会式の件

三、事業
一、二月十八日 於母校八号館
○同窓会入会式
○記念講演会
「富士山の気象」藤村郁雄氏
二、二月十八日
○同窓会会報（第七号）発行
三、七月二十三日 於沼津港より
○納涼船
四、支部……総会
一、熱海支部
四月五日 於「プリンス」
二、田方支部
四月二十一日 於「嵯峨沢館」
三、三島支部
七月七日 於「笑栄楼」

五、その他
1事務局会 六回
2三月十日 四期名簿作成
3三月十九日 三期の会
於「迎賓館」
名簿作成
4三月二十六日 二期の会
於「じゅん」
名簿作成
5二月十一日 工業（土木）科
於グランドホテル
6九月十六日 工業（土木）総会
於グランドホテル
7九月二十三日 工業（機械）総会 於母校八号館
8十月十日 工業（電気）総会
於母校八号館
9十一月一日
事務局会報発行
10その他各クラス・各クラブ同窓会

第十九期生 同窓会入会式記念講演

今年は、元ミュンヘンオリンピックバレーボールチーム監督であった、松平康隆氏を迎えることができた。卒業生のこれからの人生行路に、ひとつの記念となることができたと信じている。

思い出

十四期生 長橋俊幸

就職して、はや一年が経過しようとしている。私にとって高校時代は、規律に縛られていた感があるけれど、あまりにも自由すぎた大学生活とはまた別の意味で、懐かしい思い出であります。いつの間にか外が真暗になるまで将棋をさして、おそる〳〵職員室に下駄箱の入口の鍵を取りに行ったことこっそり下駄箱を乗り越えた日。授業始め、机の上でパチンコ玉遊びをしていたところを先生に見つかり、クラスの多ぜいが殴られたこと。時は反抗期、父親に殴られ片目を抑えつつ、好きであった女子部の生徒に会わなければいいがと思い登校、級友や先生の「どうしたんだ」という呼びかけに、返す言葉も困ったあの日。ほんとうの友達を求めていた反面、友達を理解しようともしなかった様な気がするあの頃。もっと悩み、チャレンジして、自分のまわりの人間を再発見したかったなあなんて、今ながら思います。

日本大学三島高等学校

同窓会規約

第一章　総　則

第一条　本会は日本大学三島高等学校同窓会と称する。

第二条　本会の事務所は、これを日本大学三島高等学校内に置く。

第三条　本会会員は、日本大学三島高等学校の卒業生をもって正会員とし、現教職員および元教職員をもって特別会員とする。

第四条　本会は、母校建学の精神にのっとり会員相互の親睦と融和を図り、母校の発展興隆に寄与することをもって目的とする。

第五条　本会は、前条目的達成のために左の事業を行なう。
一、会員相互の親睦と融和をはかるための各種行事
二、母校の発展興隆に関する各種行事への協力・参加
三、その他、目的達成のために必要な諸行事

第二章　機　関

第六条　本会は、事業遂行のため左記の機関を置く。
一、総会　二、幹事会　三、支部会　四、事務局
五、編集委員会

第一節　総　会

第七条　総会は本会運営の最高決議機関である。総会の議事は出席会員の過半数をもってこれを決する。
但し、必要により各支部を代表する支部長をもって、総会の決議にかえることができる。

第八条　総会は本会運営についての立案実行の一切の事務を幹事会に委嘱する。

第九条　総会は四月一日より翌年三月三十一日までの年度一回、会長がこれを召集し、幹事会、会計監査の所管事項の報告をうける。但し、緊急を要する事項に関し、会長が認めた時、又は会員多数の要求があった場合、会長は臨時に召集しなければならない。

第二節　幹　事　会

第十条　幹事会の運営機関として左記の事項を立案し総会の承認を経たのちこれを実行する。
一、予算・決算に関する事。
二、事業計画に関する事。
三、会則の改廃に関する事。
四、その他、第五条によって必要と認めた事項。

第十一条　幹事会の召集は幹事長が行ない、年三回以上、原則として過半数の幹事出席のもとに開催する。また、幹事長は幹事の三分の一以上の要求があった場合は、臨時に幹事会を召集しなければならない。

第十二条　幹事会には幹事長一名、副幹事長二名、庶務・会計二名、その他、必要とする役職を置き幹事会の互選により選出する。

第十三条　幹事会に常任幹事会を設ける。常任幹事会は幹事会の役職員ならびに常任幹事によって構成され、必要により幹事会にかえることができる。

第十四条　幹事会は本会運営上、必要と認めた場合に臨時に特別の機関を設けることができる。

第三節　支　部　会

第十五条　本会は各地区に支部会を設け、本会の目的達成の推進を図る。

第十六条　支部の運営については、本規約に準じ細則は各支部によるものとする。

第四節　事　務　局

第十七条　事務局は幹事会のもとで本会運営を円滑ならしめるよう務める

第十八条　事務局は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第五節　編　集　委　員　会

第十九条　編集委員会は幹事会に所属し、原則として年度一回の会報発行、その他、本会運営上、必要なる広報の任にあたる。

第二十条　編集委員会は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第三章　役　員

第二十一条　本会は左記の役員を置く。
会長一名　副会長一名　幹事長一名　副幹事長二名　幹事、常任幹事、会計監査二名

第二十二条　会長、副会長は、幹事会の推選により、総会の決議をもって選出する。会長は本会を統理し、副会長はこれを補佐する。

第二十三条　幹事長は幹事会を代表し、本会運営の責任を負う。

第二十四条　副幹事長は幹事長を補佐する。

第二十五条　幹事は各卒業学年の代表者が当たり、学年の意見を代弁し併せて会務を分担する。

第二十六条　常任幹事は各地区支部会の代表者が当たり、地区の意見を代弁し併せて会務を分担する。

第二十七条　会計監査は総会において選出され、経理を監査し、総会にその旨を報告し承認をうける。

第二十八条　各役員は総会の承認を経て、その任につき職務にあたる。任期は二年とする。但し、重任はさまたげない。

第四章　会　計

第二十九条　本会の経費は会費ならびに寄附をもってこれに当てる。

第三十条　正会員は卒業時に終身会費を日本大学三島高等学校会計課に納入する。

第三十一条　本会の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする

第五章　表彰・その他

第三十二条　本会に貢献したものは会長が幹事会の議により、総会の承認を得、これを表彰することができる。

第三十三条　会員として名誉を毀損する行為があったときは、会長が幹事会の議により総会の承認をえ、これを除名することができる

第三十四条　顧問は会長がこれを委嘱し、本会運営上の諮問に応える。

第六章　附　則

第三十五条　規約の改廃については幹事会の議により、総会の承認をえて行なう。

第三十六条　制度施行　昭和三十六年三月十一日
改正施行　昭和四十七年四月一日
改正施行　昭和五十三年四月三十日

表彰規定

前文　本規定は日本大学三島高等学校同窓会規約第五章三十二条に基き、その適用細則を定めたものである。

第一条　本会々員にして、社会的に顕著な業績をあげた者に対し、所定の手続きを経て表彰することができる。

第二条　日本大学三島高等学校に在籍する者で、将来、国家社会に貢献し、母校及び本会の発展に寄与できる有為な人物及び団体に対し、奨学金又は奨励金を支給することができる。

(一)　奨学金の支給をうける者は、最終学年に在籍し、在籍期間中、学業成績・人物・自治活動・健康に優れ有為な人物として学校長より推薦された者とする。ただし奨学金は一名を原則とする。

(二)　奨励金の支給をうける団体は、生徒会所属の団体で、顕著な業績をあげ更に一層の充実・発展が期待されるものとして、学校長より推薦された団体とする。ただし奨励金は一団体を原則とする。

第三条　第一条、第二条の表彰式は、年度末とし、総会または入会式に行う。

付　本規定は昭和五十二年二月十二日より施行する。